

を除く、解無きが故に」と。随いて次下の随喜品に至りて、上の初随喜を重ねて之を分明にす。五十人は是皆展転劣なり。第五十人に至りて二の積有り。一には謂く、第五十人は初随喜の内なり。二には謂く、第五十人は初随喜の外なりと云うは名字即なり。「教弥実なれば、位弥下れり」と云う積は此の意なり。四味三教より円教は機を摂し、爾前の円教より法花経は機を摂し、迹門より本門は機を尽すなり。「教弥実位弥下」の六字に心を留めて案ずべし。

問う、末法に入りて初心の行者必ず円の三学を具するや不や。答えて曰く、此の義大事為り。故に経文を勘え出して貴辺に送付す。所謂五品の初・二・三品には仏正しく戒・定の二法を制止して、一向に慧の一分に限る。慧又堪えざれば信を以て慧に代う。信の一字を詮と為す。不信は一闡提・謗法の因、信は慧の因、名字即の位なり。天台云く、「若し相似の益は隔生すれども忘れず。名字・観行の益は隔生すれば即ち忘る。或は忘れざるも有り。忘るる者も若し知識に値えは宿善還りて生ず。若し悪友に値えば則ち本心を失う」云云。恐らくは中古の天台宗の慈覚・智証の両大師は天台・伝教の善知識に違背して、心を無畏・不空等の悪友に遷せり。末代の学者、恵心の往生要集の序に狂惑せられて、法花の本心を失いて弥陀の権門に入る。退大取小の者なり。過去を以て之を惟うに、未来には無数劫を経て三悪道に処せん。若し悪友に値えば則ち本心を失うとは是なり。問うて曰く、其の証如何。答えて曰く、止観第六に云く、「前教其の位を高くする所以は方便の説なればなり。円教の位下きは真実の説なればなり」。弘決に云く、「前教より下は正しく権実を判ず。教弥実なれば位弥下く、教弥権なれば位弥高き故

に」と。又記の九に云く、「位を判ずることをいわば、觀境 弥深く、実位 弥下きことを顯す」と云云。他宗は且く之を置く。天台一門の学者等、何ぞ「実位 弥下」の釈を聞きて、惠心僧都の筆を用うるや。畏・智・空と覺・証との事は追つて之を習え。大事なり、大事なり、一閻浮提第一の大事なり。心有らん人は聞きて後に我を外め。

問うて云く、末代初心の行者は何物をか制止するや。答えて曰く、壇・戒等の五度を制止して、一向に南無妙法蓮花經と稱せしむるを一念信解・初隨喜の気分と為すなり。是れ則ち此の經の本意なり。疑いて云く、此の義未だ見聞せず、心を驚かし耳を迷わす、明らかに証文を引きて、請う、苦に之を示せ。答えて曰く、經に云く、「我が為に復塔寺を起て及び僧坊を作り、四事を以て衆僧を供養することを須いず」と。此の經文、明らかに初心の行者に壇・戒等の五度を制止する文なり。疑いて云く、汝が引く所の經文は但寺塔と衆僧と計りを制止して、未だ諸の戒等に及ばざるか。答えて曰く、初めを挙げて後を略す。問うて曰く、何を以て之を知らん。答えて曰く、次下の第四品の經文に云く、「況んや復人有つて能く是の經を持ち、兼て布施・持戒等を行ぜんをや」云云。經文分明に初・二・三品の人には壇・戒等の五度を制止し、第四品に至りて始めて之を許す。後に許すを以て知りぬ、初めに制することを。問うて曰く、經文は一往相似たり、將又疏釈有りや。答えて曰く、汝が尋ぬる所の釈とは、月氏の四依の論か、將又漢土・日本の人師の書か。本を捨てて末を尋ね、体を離れて影を求め、源を忘れて流れを貴ぶ。分明なる經文を聞きて論釈を請い尋ぬ。本經に相違する末釈有らば、本經を捨てて末釈に付くべきか。然